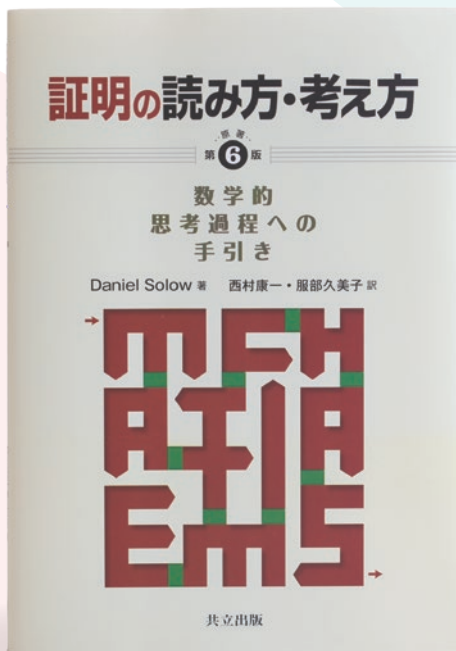


01
“新”塾生への
推し本



Daniel Solow 著、
西村康一・服部久美子訳
『証明の読み方・考え方』

共立出版

〈推しコメント〉

数学の証明には決まったルールがあります。そのルールを理解すれば誰でも証明の読み書きができるようになります。本書では、ルールを項目ごとに整理し、分かりやすく説明しています。論述力向上を目指すなら、たとえ数学専攻でなくても役立つに違いありません。



推し本

教員が選ぶ

新学期におすすめ！

SNSをはじめとするネットコンテンツからの情報収集が当たり前になった今。読書を趣味にする塾生の皆さんも、電子書籍を読むことが増えているのではないのでしょうか。大学生になると「紙の本」に触れる機会も多くなります。これを機に、レポートや課題のためではなく、自分の世界を広げるために本を手にとってみませんか。本の重みや紙の手触りを感じながらの読書は、きっと特別な体験になります。本誌『塾』編集委員の教員たちが、それぞれの特別な体験となった「推し本」を紹介します。



岩井克人著

『ヴェネシスの商人の資本論』

ちくま学芸文庫

[環境情報学部 | ^{わたなべやすし}渡辺靖教授の推し]

〈推しコメント〉

初刊は1985年。私が大学に入学した当時、尊敬する教授が新入生に薦める一冊に挙げていたので手に取りました。シェークスピアの名作を手がかりに貨幣や資本主義の本質に迫る名著。文体も平易で、エッセイのように読み進めることができます。

[薬学部 | ^{なかむらともり}中村智徳教授の推し]



日向夏原作

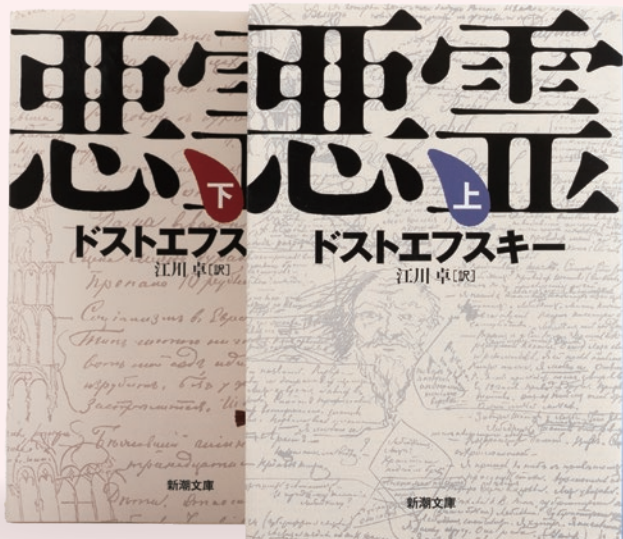
『薬屋のひとりごと』

小学館

〈推しコメント〉

豊富な薬の専門知識を持つ主人公が、(架空の)中華帝国王宮に官女として勤めることになり、そこで起きるさまざまな難事件に対し、薬学的知識を駆使して解決していくミステリー&ラブコメディです。薬学の教員や研究者にも多くの愛読者がいるお薦めの本です。

[理工学部 | ^{おかともひろ}岡朋治教授の推し]



ドストエフスキー著、江川卓訳

『悪霊』(上・下)

新潮文庫

〈推しコメント〉

大学入学間もない頃、厨二病をこじらせた僕はロシア文学を読みあさっていました。一番衝撃を受けたのがこの小説です。何とも言えない、決して幸せではない後味が残ります。こういうものには(あまり苦勞していない)若いうちに触れておくのが良いでしょう。

01

“新” 塾生への 推し本

吉田栄介・
花王株式会社会計財務部門編著
『花王の経理パーソンになる』

中央経済社

〈推しコメント〉

メーカーの経理財務部門に興味のある学生向けの本です。学生にとって実際の仕事のイメージは湧きにくいですよね。そこで、入社後のキャリアパスを経ていくストーリー構成、若い先輩からのメッセージ掲載、さらに深く学びたい人のための文献紹介が特徴です。

【商学部 | ^{よしだ えいすけ}吉田栄介教授の推し】



02

塾生への 推し本

【学生総合センター長 | ^{たのうえ まさなる}田上雅徳教授の推し】



カール・バルト著、小川圭治・岩波哲男訳

『ローマ書講解』(上・下)

平凡社ライブラリー

〈推しコメント〉

読み直すたびに新たな発見があるのが古典だそうです。学生時代にヒョウラの古書店で入手し、徹夜して読み通した宗教史上の古典を、私は再読できません。あのときの感激を覚え得なかった場合が、怖いからです。古典に挑めるのも、若さの特権の一つです。

上枝美典著

『神さまと神は
どう違うのか?』

ちくまプリマー新書

〈推しコメント〉

西洋の思想や文化を学ぼうとしたときに、真っ先につまづくのは、東洋にはない強力な神の概念です。科学技術が発達し、悲惨な戦争や紛争の絶えないこの時代に、どうして西洋の人々は全知全能の神を信じてこられたのか。この本は、その理由が、西洋の宗教の背後にある西洋の哲学にあるのではないかと考えます。宗教の「神さま」と哲学の「神」を比較することで、西洋哲学の入門としても適しています。



[文学部 | ^{うえさだよし のり}上枝美典教授の推し]

「法学部
教員
推し
本
将
典
准
教授の推し」



伊東道風著

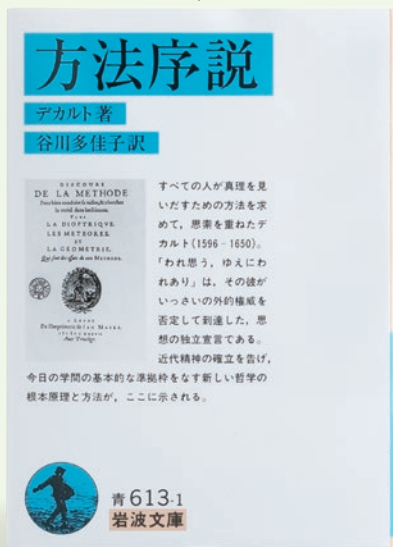
『万年筆バイブル』

講談社選書メチエ

〈推しコメント〉

表面張力や pH といった自然科学系の話から世界各国の文化・社会と万年筆の関係などの人文・社会科学系の話まで、万年筆選びのための実用書の域をはるかに超える「知る楽しみ」を与えてくれる一冊です。一生の相棒となる一本と共に新学期を迎えてみませんか。

[看護医療学部 | ^{すぎもと}杉本なおみ教授の推し]



ルネ・デカルト著、谷川多佳子訳

『方法序説』

岩波文庫

〈推しコメント〉

情報過多の今日、自身が「本当に分かっていること」は、案外少ないのではないのでしょうか。情報なんて、しよせん誰かの受け売り。他人の考えに支配されない、ブレない自分を見つけるためのレッスンを始めてみませんか。昨日までとは違った世界が見えてきます。

【総合政策学部 | 清水唯一郎教授の推し】

【常任理事 | 岩谷十郎教授の推し】

久米邦武編著、水澤周訳・注

『特命全権大使 米欧回覧実記』 (普及版、全6巻)

慶應義塾大学出版会

〈推しコメント〉

春学期は走り抜けているうちに終わります。ゆっくりできる夏の夢を思い描くのはいい息抜きになるでしょう。お薦めは150年前の日本人が世界をどう見たかを教えてくれるこのシリーズです。これを手に世界と日本を、現在と過去を往き来してみてください。



鈴木孝夫著

『閉ざされた言語・日本語の世界』

新潮選書

〈推しコメント〉

今や世界言語となった英語について、日本人は日本語訛りの英語を堂々と用いてよい、と今から50年前に力説した言語学の泰斗、鈴木孝夫（慶應義塾大学名誉教授）の本。高校生の時に同書を手にとった私は、言語観が大転換し、まさに目から鱗の体験をした記憶があります。

【医学部 | 中川種昭教授の推し】



荒俣宏著

『福翁夢中伝』(上・下)

早川書房

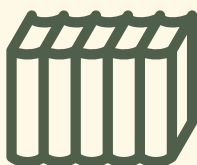
〈推しコメント〉 最新の情報を使用しながら著者が福澤本人になりかわり、“わがはい”が生涯を語るといった、独特の書き方で進んでいく。福澤先生の生涯を学びながら、人との出会いやご縁の大切さ、慶應義塾の今後を考える上でぜひ若い方にも読んでいただきたい。

→ p.32の「BOOK WINDOWS」でも紹介しています。

03
人生に影響を
与えた一冊

大学で本を借りてみよう [各キャンパスのメディアセンター]

慶應義塾大学には各キャンパスにそれぞれ特色ある図書館（メディアセンター）があります。春は新入生向けのおすすめ本コーナーを設置するメディアセンターもあり、読書を始めるには最適な時期です！



5,290,000+

蔵書数は全キャンパスで約529万冊！



390

情報リテラシーの講習会や研究に役立つガイダンスなどを毎年約390回開催！



日吉メディアセンター



湘南藤沢メディアセンター



各メディアセンターへのアクセス、特徴についてはp.15～22のCAMPUS LIFEをチェック！



「中等部主事」**芳賀晋作**教諭の推し

野崎昭弘著

『逆説論理学』

中公新書

〈推しコメント〉

ふんだんに盛り込まれたパラドックスで頭の体操はいかがでしょう。正解のない問題にどう答えますか。学生の珍解答もあり、楽しく読み進められると思います。



私たちが推しました！

『塾』編集委員とは？

本誌『塾』は慶應義塾と塾生や保護者の皆さんを結ぶコミュニケーションツールとして、1963（昭和38）年に創刊されました。編集にあたっては学部・一貫教育校の教員および職員が編集委員として年4回の発行に携わっています。今回「推し本」を紹介した編集委員は、毎号各コーナーに登場する教員・学生の選出や、記事の監修を担っています。研究や学問といったアカデミックな視点と、塾生の皆さんに寄り添う視点、どちらも大事にしながら、多くの方々楽しんでいただけるよう努めています。